

研究動向

敦煌研究院、上海圖書館及び天津芸術博物館所蔵の敦煌遺書をめぐって

施 萍 亭

(池田 温訳)

敦煌莫高窟藏經洞(十七窟)出土の文字資料についてはよび名が多様であつて、敦煌写經・敦煌古文獻・敦煌文書・敦煌卷子・敦煌写本など一定していない。パリに現在住んでいる左景權氏は、かつてこの問題について専論する文章を書いた⁽¹⁾、北京大学で出版している専門の刊行物は《敦煌吐魯番文獻研究論集》と名づけている。敦煌文物研究所が機構改革して敦煌研究院となつた時、敦煌遺書研究所が生まれた。当時私どもも名称について討論を進め、結局《敦煌遺書》の名を使うこととなつたが、それには中国でこれら敦煌文字資料の最も系統的で網羅的解説書が《敦煌遺書総目索引》であることが主に配慮された。この書の影響は非常に大きく、これをたたえる人は多いが、その人

は少ない。⁽⁵⁾《敦煌遺書》の語は、少くとも国内で敦煌学にたずさわる人は誰でもよくわかる。もつとも本当の所、どの語もすべて完全に正確、科学的とはいえないのだが……。

(一) 敦煌研究院藏敦煌遺書

敦煌研究院の収蔵する敦煌遺書は、すでに登録されたもの七〇〇点以上、未登録のものも相当あり(但し細片が多い)、総数は約一〇〇〇点ぐらいある。これらの遺書には漢文、チベット文、サンスクリット、ウイグル文があり、写本もあれば刻本もある。漢文部分についてはすでに目録を発表した(文物資料叢刊第一期、一九七七年)⁽⁶⁾。少数民族文字部分は、国内の少数民族文字専門家の多くがこれをすでに見ており、特に黄文煥氏(チベット自治区宗教研究所所長)は見た時間が最も長くチベット文遺書の目録を作つた(未発表)。黄氏はそれについて総合的考察の類をすでに発表されている⁽⁷⁾。

敦煌研究院の収蔵品について説明すべき諸点は以下のとおりである。

(一) 来源

主要な来源として

- (1) 莫高窟窟前土地廟出土

- (2) 個人の寄贈
- (3) 購入
- (4) 没収

の四種がある。土地廟出土の遺書を『敦煌遺書』とよぶことに誰も反対しないが、しかしそれが藏経洞出土品か否かについては、現在意見が一致していない。一九四四年著名な学者向達・夏鼐・閻文儒氏らが『西北考察團』のメモパ一となつて敦煌で調査を行つた時、莫高窟に住んでいた。当時、敦煌芸術研究所が土地廟をとりこわし、破損した泥像をぶちこわした時、木胎をつつんでいた写経がみつかった。常書鴻所長の話によると、かれはこのニュースを大きくやただちに向達氏らに連絡し、点検登録をあたかも『三堂会審』（大法廷で法官ら立会いの嚴重審判）のように行なつた。閻文儒氏は北京に返つて間もなく一篇の文章を書き、これらの写経は王道士の手をへたもので、功德のため塑像を補修した際にそこに入れたものだとのべた。私は閻氏のこの見解に同意する。その理由は、当時すでにその廟は『土地廟』と名づけられており、清代以前の建築ではありえない点がひとつ、又たとえその名を知らなくても、もしそれが古代の建造物なら、敦煌芸術研究所はそれを保護こそすれとりこわすはずがない点が二、さらにもし塑像が清代以前の作品なら破損していても運び出して保存

したはずで、ぶちこわすはずがない点が三。そして最後に、これが最も信すべき点だが、土地廟出土の『法華經』には何と李盛鐸の売つた『法華經』とピッタリ接合できるものがあるのである。

個人の寄贈品には、敦煌の名士任子宜、鄧秀峰の收藏品や周炳南の收藏品が含まれている。周炳南は字靜山、甘肅省狄道県（今の臨洮県）の人で保定陸軍学堂出身。かれは北洋軍閥統治時期にかつて長年安肅道（今の酒泉地区）に鎮守し、『肅州巡防各路幫統兼帶第四營』に任じ、人から『周統領』とよばれていた。一九二五年アメリカ人ウォーナーが二度目に敦煌にやつてきて第二八五窟を剝離して持返ろうと計画した。この窟は西魏大統年間（479-534）に修造され、現在でも紀年題記が保存されており、歴史的価値、芸術的価値のいづれからいっても、莫高窟中一二を争う代表窟である。周靜山は当時ウォーナーに対し礼節をつくしその安全を保護したが、しかし敦煌の文化財を護る上では一寸たりと譲歩しなかつた。かれは敦煌に鎮守した期間に若干の写経残片や文書を収集し、それを二冊に装幀してその表紙に『敦煌石室遺墨』と題した。天宝年間奴婢売買文書（市券）や元の延祐三年（一三二一）奴婢売買（紅契）はすなわち周氏の收藏品であつた。延祐文書はわれわれの発表した目録にはのせていないが、それは藏経洞出土品でなく、

伝世文書である点を考慮したからである。¹⁰ 吳曼公が寄贈した「臘八燃灯分配窟龕名數」も、現在知られる範囲では他に類例のないユニークな莫高窟の歴史文書である。

購入品については、何人かの民間収蔵者の物の外、特に二人の人物の収蔵品が言及に値する。その一は張大千が窟前で得た景雲二年（七一）「張君義告身」である。これと同時に出土した景龍三年「公驗」は、日本の天理図書館に現存する。「張君義告身」は張大千氏がかつて日本に齎らし巻軸に表装した。かれは晩年故郷に想いを寄せ、また敦煌をなつかしんでこの告身を原地に帰らせようと思つた。このことは転々と香港を経由して北京に伝わり、国家文物事業管理局は特に人を派遣して香港から買戻し、後に敦煌研究所に交付したものである。張大千が在日中、日本の友人がこの告身の写真をとり、のちに大庭脩氏が唐代告身について論文を書き、この張君義告身に対して研究を深めて「西域文化研究」に發表した。

もう一つは張維の収蔵品である。張維は字鴻汀、「隴右金石錄」の作者であり、金石の鑑識にすぐれ収蔵に富んでいた。かれが歿してのち写経が続々と売りに出され、詳細な状況は不明であるが、敦煌研究院収蔵品中の「説苑反質篇」はもと張維の収蔵であつたといわれる。その他、敦煌地もとの名士の収蔵で後に子孫が売つたものがあり、

「三國志歩驚伝」残巻はそうした購入品の一つである。

中国は土地改革の時期に曾つて地主の財産の一部を没収した。それで敦煌研究院収蔵写経の一部分は、政府から交付されたこれら没収品からなる。しかしこれらの中には優品はみられない。文化大革命期間に造反派は「四旧」を除くべく、また若干の人の家から写経を没収した。当時は無政府状態にあり、紅衛兵は勝手気ままにそれが誰の物とも知らず持出した。文革が終つてから物はもとの持主に返されたが、一部の品は結局は返される先がなく、敦煌研究院に提供されたが、それは十点あまりある。

(二) 一九七七年発表の目録について

「文物資料叢刊」に發表した「敦煌文物研究所藏敦煌遺書目録」は、私と劉忠貴の両名が作製したもので、同誌にわたして公刊した際私はもう一度検討を加え、そして「敦煌遺書目録に関する説明」を書いて附録として併せ發表した。十何年の後その目録と説明を再検してみると、以下の諸点に気づく。

(1) 研究院収蔵の遺書は完全なものが少く、残缺したものも多く、僅か三行だけのものさえあり、名称決定がなかなかむづかしい。しかしわれわれは少なからぬ時間をかけ努力し、すべてわれわれが名称を付した仏経は、みな「大正藏經」と逐字比較した結果であるから正確といつてよい。

- (2) 夫々について簡単な説明を加え、題記を録出した。
 (3) 全体の概観的紹介を附した。
 (4) 尺寸、紙数、行数及び時代判定を明記しなかったのは、本目録の主要な欠点である。

(5) 名称に妥当でないものがある。例えば031の「張君義告身」は、われわれも大庭脩氏のつけた名称が正確で誤りないものとわかつていたのだが、張大千氏の題簽の原状を保存するため、そのとおりに「景雲二年右驍騎尉張君義等二百六十三人加勳勅文」と題し、特に説明を加えなかった。ところが張大千氏の題簽には大きな錯誤が存したのである。事情は以下の如くである。告身中に

右驍騎尉……

という一行があるが、文書全体から見るとここには一字脱字があり、本来は

右可驍騎尉……

とあるべき所で、「右」の字は「以上のべたところ」の意味である。そして職官の制度から云っても驍騎尉には左右の別はない。

(6) 録文に不完全なものがある。「長興伍年三界寺藏論目錄」の題記は前半だけを移録して後半に及んでいない。当時誤まりを犯すことを惧れた爲であった。この題記の原文は次の通りである。

長興伍年歲次甲午六月十五日、弟子三界寺比丘道眞、乃見当寺藏内經論部〔帙〕不全、遂乃啓頼虔誠、誓發弘願、謹於諸家函藏、尋訪古壞經文、收入寺、修補頭尾、流傳於世、光飾玄門、万代千秋、永充供養。願使龍天八部護衛神沙、梵釋四王永安蓮塞、城隍泰樂、社稷延昌。府主大王常臻寶位、先亡姻眷、超騰會遇於龍花、見在枝羅、寵祿長沾於親族。應有藏内經論、見為目錄。

發表時にはわれわれはただ「流傳於世」までしか録出しなかつた。

(三) 価値の高い若干の遺書

敦煌研究院収蔵の遺書には、書法と用紙から見て北朝の遺物の比例が大きく、年代のある題記が七点もある。すなわち北魏の興安三年(四五四)和平二年(四六一)天安二年(四六七)皇興二年(四六八)太和十一年(四八七)太和十二年(四八八)、南齊の建武四年(四九七)である。年代を含む題記のあるもの必ずしも非常に高い価値があるとは限らず、もし何の内容もなければ僅かに時代判定のものさしに使えるだけにすぎない。既発表の三〇〇余点の遺書中、やや価値の高いものに、

(1) 「歩騫傳」がある。

歩騫は三国時代の孫呉の人で「三国志」卷五二呉書第七

に本伝があり官は丞相に至った。かれの死後男子の步闡が撫軍將軍を承襲し西陵都督に任じ、後に西晋に降り、その弟步瑁を派遣し洛陽に行つて人質とした。孫皓が陸抗を派遣して討伐に当らせ、步闡らは斬られ、「步氏泯滅し、唯だ瑁祀を紹ぐ。」という。現在出版されている二十四史とこの写本には稍出入がある。現行本は、步闡が兄弟步協の子「璣と瑳」を「洛陽に詣り任と為さしむ」に作る。この二三字のわずかな異同で、千年の謬誤を糾正し得る。現行本は步瑁を步瑳に作っている。かれは洛陽にいたので孫皓が步氏一家を殺した時、ずっと離れて殺されずすみ、そこで史書に「步氏泯滅し、唯だ瑁祀を紹ぐ」とみえるわけである。現行本のように璣と瑳二人が洛陽に行つたのなら、「唯だ瑳祀を紹ぐ」にも適合しない。

(2) 興安三年(四五四)大慈如来告疏⁽¹³⁾

敦煌遺書中絶对年代の題記があつて真品に属すものは、まずS七九七(十誦比丘戒本)があげられ、時代は西涼の建初元年(四〇五)であり、その次がこれに当る。上海に義和戊寅(四三八年)のものが一点あるが真偽不明なので除く。本品は下部が残缺し、全文を完全に識ることはできないが、しかし全体の趣旨はなお理解できる。それは人々に弥勒仏の信仰をすすめる、信者は利益を得、不信者は地獄に落ちて出られる時はないという。これによって、敦煌の

十六国時代晩期の仏教芸術が全面的に弥勒と関係あるのがどうしてなのか探知することができるであろう。

(3) 康氏の五色幡を造る發願文⁽¹⁵⁾

康氏(優婆姨)は眼病をやみ、發願して五色幡一個を造り、仏にかれの眼病が愈れば又幡を作ると祈請している。

(4) 《文選、運命論》⁽¹⁶⁾

(5) 《說苑、反質篇》

これは唐初期或いは隋代の遺物である。《說苑》は漢の劉向の著作でもと二十篇よりなるものであったが、唐以後は十五篇を残すのみとなった。宋人が朝鮮半島の高麗から第十五(二十篇)を手に入れ伝来本を補ない全書として刊行したのが、今日通行の本である。敦煌研究院藏本反質篇は、まさに当年散佚していた最後の一篇(第二十篇)に当り、そして唐代の写本である。

(6) 景雲二年(七一)張君義告身

日本の大庭脩、中国の朱雷はいずれも本品に対し研究を加えた。

(7) 唐天寶年間奴婢売買ノ市券⁽¹⁹⁾ 複本

この種の内容の文書は現在知られるかぎりこの一点のようである。

(8) 三界寺藏内經論目録⁽²⁰⁾

これは道眞の人と事跡を研究するにはもとより、藏經洞

遺物の研究全般にとって価値がある。

(9) 臘八燃灯分配窟龕名數(九五一年)⁽²¹⁾

これは石窟考古に對し絶好の資料となる。

(10) 酒歷⁽²²⁾

これはP二六二九と接合することができ、官庁の酒の支出帳なので歴史史料として価値が高く、その中にみえる『南山』の問題は西北地方の歴史、地理研究者の間で重視されている。

中国国内の諸機関収蔵の敦煌遺書のうち、最近十年間に研究が比較的活潑に進み成果が突出しているのは、わが敦煌研究院である。遺書研究所ができたとき、曾て世界各国の敦煌遺書研究情況を分析した所、我々は日本やフランスに及ばないことがわかり、当時採るべき方針としては、まず『長を揚げ短を避け』るべく、できるだけ速かに我々のもつ価値ある遺書を紹介するに努めたのであった。敦煌研究院所蔵の佛經のうち比較的罕見のものとして、

- (1) 采花違王上佛授決号妙華經⁽²³⁾
- (2) 佛說祝毒經⁽²⁴⁾
- (3) 佛說阿難律經⁽²⁵⁾
- (4) 佛說悔過經⁽²⁶⁾
- (5) 鞞婆娑論中陰⁽²⁷⁾
- (6) 旧雜譬喻經卷上⁽²⁸⁾

- (7) 大方廣三戒經⁽²⁹⁾
- (8) 佛說幻土仁賢經⁽³⁰⁾
- (9) 佛說八師經⁽³¹⁾
- (10) 佛說大藥善巧方便經⁽³²⁾

(二) 上海圖書館藏敦煌遺書

上海圖書館と上海博物館はともに古写經を所蔵しており、この二機関については私が整理を手伝ったのである。当時われわれの間では紳士協定を結び、われわれは決して発表したり、先に研究したりせず、われわれは『敦煌研究』の誌面を提供してこれらの名義で整理の結果を公表することとした。天津芸術博物館の所蔵写經についてもこれに準じた扱いとした。こうした條件にもかかわらず、天津芸術博物館はただ所蔵の一半を提供したにとどまり、上海博物館は全然一点も公表しなかった。もっとも上海博物館の蔵品の一部は、後に香港で国際敦煌學術討論会が開かれた時に展覽され、同時に『敦煌吐魯番文物』一書が出版された。

上海圖書館が発表したのは二二四点あり、これらと同館ではもとすべて『敦煌遺書』として収蔵していた(同館には他にも古写本の所蔵はある)。その来源は、上海市文物

管理委員会から移管されたものと、他は陸統と購収されたものである。一九八四年私が上海に行き調査の過程で、それらの一部は伝世品で藏経洞出土ではなく、また一部は日本の古写經であることを見出した。そこで同館所藏写經目錄を公表する際へ「附伝世本写經及日本古写本」の副題を付し附録としたのである。上海図書館の館員諸氏はもともとこれら日本の写經には注意を拂っていないかった。これらは善本乃至珍本に属するので、普段は閲覧に供されず、人の知る者稀であり、管理している人々の大半は研究にはたずさわっていないかった。上海図書館の目錄が公表されるや、関係者たちの普遍的注目を引き、「附録」について特に高く評価され、目錄公刊にあたり、「伝世本」と「日本古写經」を弁別した点は、それ自体研究の成果を盛ったものと認められたのである。というのは文化大革命終了後曾て北京図書館が《敦煌劫餘録続編》を出版したが、この目錄の缺点の1が、日本古写經を敦煌写經として含めて登載した所にあつたからである。しかしそれはそれとして、上海の目錄にも不足のところが目につく。技術的な問題では、各件の○紙○○行の注記が脱漏したものがあり、他方時代の判断が主に書家の見方によつていて科学的根拠にかけている。敦煌遺書・伝世本・日本写經の区別についても問題がある。例えば001へ大般涅槃經光明遍照高貴德王菩薩品第十之六へ

には原題竅があり「敦煌石室唐人写經 南海康氏万木草堂藏」と見え、卷首に「南海康有為藏 甲寅八月」とある。甲寅年は一九一四年であり、この時には藏経洞出土敦煌写經の残餘がすでに北京に運ばれた後であるから、康はこれを入手し得たろうが、問題はこの時康有為が一体どこに居たかにある。

又085《妙法蓮華經》は首尾完具し、開寶六年（九七三）杜遇の写した「金銀字妙法蓮華經」であり題記をそなえ、菴青色の紙に書かれ折經装で扉頁に画がある。卷端下部に不規則楕円形の朱印がおされ、印文に「維新百日出亡十六年、三周大地游遍四洲、經三十國、行六十萬里」とある。022《金剛般若經》にも「南海藏經」印が捺されている。これら三卷の經ははたして敦煌写經であろうか？康有為はそれらをどこで入手したのか？私は当時数日の時間しかなかったため、それについて立入った検討ができず、上海図書館の人々に調査を依頼したのだが、残念ながらこの方面については精査が加えられなかつたらしい。

121《中阿含經》は卷尾に「法隆寺一切經」の印がある。私はただ日本に法隆寺のあることを知るだけで、中国での存否を知らぬが、もし中国に法隆寺が無ければこれは日本写經であろうとした。上海図書館員は「説明」中に「本件は敦煌藏経洞遺物でない可能性あり、待考」とするにとど

まっております。これを見ると法隆寺について特に調査しなかつたと見える。058《妙法蓮華經》七卷、一卷一冊、弟子彰義軍節度使錢宏信敬舍（捨）とあるものも恐らく伝世本であろう。

上海図書館収蔵品中にも注目に値するものが色々ある。以下それらを五項に分つて略説しよう。

(一) 康有爲は維新變法に失敗して後、転向して佛教を信ずるようになったことはひろく知られているが、敦煌出土仏經と康の關係についてはほとんど知られていない。康の『維新百日出亡十六年、三周大地游遍四洲、經三十國、行六十萬里』の印章が佛經の上に捺されているのは、読む者をして丁度五味瓶をひっくりかえし甘酸苦辛諸味がこつたになった感をいだかせる。上記三件の康の印の捺された佛經は、たとえ出処がいずこであれ現在ではいずれも貴重な存在である。

(二) 何人かの文人名士の蔵品が上海に集められているのは大変興味深い。04《妙法蓮華經》には八篇の跋があり、何人かの字や号は目下誰のものかと定められぬが、それはわれわれが民国時代の人名についてよく通じてはいない結果である。すでに確かめ得た人物の中で、陳聞は以前にはあまり知られていなかった。陳聞、字季侃、浙江の人。蔵經洞文物が出土した時期に、かれは丁度甘肅で役人をしてお

り、若干の写經を入手した。すべてかれの蔵品は、いずれも表装がほどこされ、題款・序・跋の類が附されている。上海図書館の外、杭州靈隱寺の古写經もまた陳聞の収蔵品である。

許承襲も当時の甘肅の官員であり、若干を入手したが、いかなる経路によつてか不明ながらそれらが上海図書館に帰属している。上海図書館の蔵品には題跋が多く附され、これが一大特色をなしている。目録公布の際、それらの一部分を収載したにとどまるが、もし全部が発表されれば大いに意義あるものとなろう。

(三) 宣統二年（一九一〇）、清朝の学部が人を派遣して蔵經洞出土写經の残つていたものを京師に運ばせた。その時何彦昇は甘肅の代理巡撫としてこの事に當つた。彦昇の息子何鬯威がすなわち李盛鐸の女婿であつた。李・何両家の敦煌写經は、実に取扱者が「監守自盜」（管理責任者が自分で盗み取る）により入手したものであつた。ところが何家の蔵品は、一部日本に流入したものを除き所在が知られていなかった。だが上海図書館収蔵品中、少くとも一四七・一六六の二点は確かに何家の旧蔵である。葉恭綽が珍宝とみなした北魏写本《大般涅槃經》も何家の物であつた。

(四) 上海図書館蔵敦煌本の大多数は仏經であるが、その中には有名な人士や文人の題跋が少なくない（目録参照）。

その他で特筆すべきものに

(1) 有相夫人昇天変文 (一六九、一七〇)⁽³⁸⁾

(2) 敦煌石室掇佚七種⁽³⁹⁾

がある。

(五) 上海図書館蔵古写経のうちで最も意義深いのは日本写経部分である。中国ではこのようにまとまって日本古写経を保存している所は多分少いであろう。当時われわれの日本古写経と確定したものが三五件あり、この数字は小さなものではない。われわれが日本写経と認めた標準は、

(1) 題記に日本の年号のあるもの、大寶・天平・天長・保安・建久・建保・元仁・嘉承・寛喜・延應・寛元・寶治・弘長・弘安・元亨・嘉曆・貞和・正平・應永・永安・寶徳・寛正・天文・文政・明治、以上計二五個の日本年号が見える。

(2) 経文に日本のカナの注記のあるもの。

(3) 『高山寺』、『高山寺方便智院』、『楊守敬』、『惺吾海外訪得秘籍』等の印章のあるもの。楊守敬は字惺吾、亦星吾にも作る。光緒六年(明治十三年、一八八〇)清朝駐日大使何如璋の聘に応じ、日本に来て四年間住み日本に保存されていた少なからぬ中国古籍を蒐集し、『日本訪書志』を著した。かれは又少なからぬ日本古写経も集めた。上海図書館の三五点中、少くも一五点には『惺吾海外訪得秘

籍』或いは『楊守敬』印が捺されている。

これらの日本古写経には本来の題記の他、中国人の手に渡った際の題跋や、更に日本人の跋を附したのものもある。190『法集經卷第二』は、下部東という名の日本人が上海の哲甫(吳蔚光?)氏に送ったもので、跋文中にこれらの間の友誼が叙べられていて大面白。又一九二、一九六号、特に一九六号は皇后藤原氏光明子の写経で、発願文自体に高い歴史史料としての價値があり、その上中国人の跋が加わっていてその意義は更に深い。

これら日本写経の内容についてみると、中国の仏經中に常見せぬものが多い。200『佛生會講式』、201『印身義釋』、202『先總淨三業』、203『十九相觀略頌』、205『方便智院入我入觀』、215『涅槃講式』、219『遺迹講式』、その他『求聞持法』、『求聞持次第』等がそれである。或いは日本の僧侶の事蹟についてわれわれはたしかに殆ど通じていないが、日本歴史や佛教史を研究する人にとっては絶好の資料となるものもあろう。二二〇号には天長八年(八三一)『大僧都空海上表同勅答』の原題があり、貞和二年(一三三六)重抄にかかる。空海は中国にも名の聞こえた高僧で、われわれはこの貞和二年抄本は孤本ではないかと思う。その他三五件の日本写経中には、高山寺方便智院のものが一二件あり、これらは高山寺に関し重要な文物である。三五件の

写経中に言及される仏寺には、高山寺・高山寺方便智院・勸修寺・心蓮院・善光寺・持明院・延暦寺が見出される。

これらいずれをとっても一点一点の写経は長い歴史の流れの中の一滴であり、歴史を構成する一部分をなしている。私は当時写経の名称決定に注意を向けており、おまけに日本の歴史に不案内であった上、「紳士協定」もあつたから、日本古写経の一事について多く留意するに至らず、上にのべた所はほんの「過眼録」の一端にすぎない。東洋文庫は内外の資料を広く収集し、新資料の蒐集にも力を入れている。そこでもしこれら日本古写経の写真をとるとか、その他何でも私のお手伝いできることは最大の努力をいたす所存です。

(三) 天津芸術博物館藏敦煌遺書

天津芸術博物館所藏の写経三〇〇余件の来源は、中国の著名な文物收藏家周叔弢氏の寄贈品が二五六件を占め、主要来源をなし、その他多年にわたって購取したものからなる。周叔弢氏は鑑識にすぐれ、寄贈に際し目録、尺寸や時代判定等を附したばかりでなく、藏経盒や藏経櫃まで整えられたのである。一九八五年にわれわれがおもむいていくらかの調査を行ない、館当局は「敦煌研究」誌に目録を發表するのに同意していた。しかし何故か知らぬが、ただ二

〇〇点についてだけ送ってきたまま残りは遂に提供されなかった。かくして周叔弢氏寄贈にかかる大部分の藏品は公表されたが、購入品は発表されず、社会経済文書は一点も含まれていない。收藏された時点で記録が完備していたので、発表された分については項目がよく整い一定の形式をふみ、技術的な錯誤は見られない。しかし、「敦煌遺書」という点について吟味するなら、問題がなお少くないようである。当時われわれはいくつか問題点をあげて、これらに調査研究を進めるよう勧告したのであつた。もともと「紳士協定」があり、われわれも深く追求せず、調査が一段落した所でそうした問題にかまわなくなつてしまった。例えば津二（羯磨一卷）は北斉天保九年（五五八）の写経で、紙は非常に薄く深黄色を呈し、文字、墨色とも大変立派なものだが、見る者に敦煌写経とは似ていない印象を与える。同時にスタイン、ペリオの持去つた敦煌遺書中には北斉の紀年写経はまだ見付かつていないので、これは伝世写経ではないであろうか？

津四五には「周伯鼎鑿藏」の印一顆があり、界欄は陰線（へらで圧して筋をつけたもの）であるが、周伯鼎はどの人か知られず、陰線の界も見たことがないようだ。津四四（維摩詰經）には「寶存古物」、「中亞望瀚樓主收藏圖書章」各一顆が捺されていて界は朱糸欄であり、まことに罕

見に属するもので、無造作に『敦煌遺書』に入れてしま
うのは落着かぬ。津附一（妙法蓮華經）は『德化李氏凡將
閣珍藏』の印一顆があり、これが眞品か偽造かにかかわら
ず、『敦煌遺書』に入れるべきで、これを非敦煌遺書におい
たのは明らかに誤りである。

天津芸術博物館蔵品の最大の特徴は、完整の卷子が多く
完好品が多く、唐代写経が多きを占める点で、これは以前
の周叔弼氏の収蔵の性格と関連する。その内容、歴史的價
値からいうと、『津一四四（大方等大集經）は長さ8mに近
く、『瓜沙州大王印』の印が捺され、紙背の紙つぎ目にも
捺印されており、時代は唐とされるがそれは当らず、五代
の精品と見られる。津175（佛說無常經等四種）は五代の敦
煌名士で曆博士の翟奉達が顯徳五年（九五八）に亡母の追
福の爲に写したもので、北京圖書館藏本（岡字四四）に接
続し、ととのった社会風俗史料である。P二〇五五にも翟
奉達が死んだ妻馬氏の追福の爲の發願文と七七齋、百日、
一周年、三周年の写経目錄を記すが経文はない。

その他何点かの社会文書があるが、同館が目錄を発表し
ておらず、私の手もとにも記録が無いので暫く論及をひか
える。

（四）敦煌写本の眞偽判別

大英図書館・パリ国立図書館・レニングラード東洋学研
究所・北京圖書館及び龍谷大学圖書館所蔵の敦煌遺書を除
くと、その他公私の収蔵については、いずれも眞偽問題が
存在する。本来遺書にとって眞偽は最も肝要な問題である
ことが明瞭であり、贋品にはもとより何の價値もなく、假
を以て眞を乱すなら、後人への悪影響ははかりしれない。
しかしながら、この眞偽の問題は現在もっとも厄介なもの
である。収蔵者特に個人の所蔵品は、誰でも他人がかれの
蔵品を贋品と判定するのを望まず、それは博物館について
も同様である。

天津芸術博物館の購入品中のあるものは、比較的明瞭に
紙は新らしく墨はよくなじんでいない。けれども博物館当
局者は、天津の李木齋（盛鐸）のもとでにせものを作った
人も天津ではにせものを敢えて売ろうとはせず、博物館の
購入に当っては専門家の鑑定をへており、にせものがある
はずはないという。周叔弼先生の収蔵に至っては、更に疑
いをいれる余地はないとされる。自己の蔵品が贋品たるの
を望まぬ事は当然であり、それはよく理解できる。だが眞
品と贋品は本来客観的存在であるにかかわらず、この『客
観的存在』を正しく認識するのは大変むづかしい。中国に

ついでいえば、今日に至るまで古書画や写経の鑑定は、いずれも「経験の深さ」に頼り、科学的判定方法に缺けている。経験は貴重なものであるが、唯経験に頼ったのでは往々にして誤認を招いてしまう。敦煌研究院所蔵〇〇九六号（金剛般若經、金剛藏菩薩注）（原題）は、一種の蝴蝶装小冊子で、経文と注釈ともに未完にもかかわらず、末尾には「大唐天寶元年五月日白鶴觀御注」の題記がある。我々自身も経験ある専門家も、みなそれを純粹ににせものと認めている。その理由は、

(1) 装釘の形式がはるかに時代の降ったもの

(2) 題記と経文は一人の筆ではなく、題記の墨迹がひどく新しい

点にある。先年私はフランスに行った時「古代の蝴蝶装は結局いかなるものであったか」という問題をたずさえ、パリの蔵品と見くらべた所、結果は我々の所のそれとそっくりであった。これによってみれば、〇〇九六の小冊子は眞品であり、題記は後人がはかる所あつてほしいままに添加したものでらしい。又吉川小一郎はその日記の中で、王道士が吉川らに仏經をみせた時わざと贋品を混ぜていたとのべている。王道士が大変狡猾であつたことは、スタインの本の中にも記載があるが、しかし役所の目の届く所やかれのいう「洋人」の前では、王道士も敢えて假を以て眞を乱す

ことはしなかつた。藏經洞の遺書には好いものもあれば悪いものもあり、王道士は精品も持出したし、字もまずければ紙質もよくない写経も持出したであらう。又敦煌研究院の蔵する「張君義告身」について、「西域文化研究」を見た人は誰でもその中にかの写真圖版があることを知つて、原本は日本にあると思ひ、われわれの所にあるものにはせだと言つた。しかし原物を眼で見、張大千氏の希望を知つてから後で、疑問は雲散霧消したのであつた。かように夫々の遺書について具体的來源を明らかにできれば、眞偽の判断に有力な根據となるのである。

敦煌研究院の〇二八七「吳志歩鷲伝」殘卷について、一人の鑑定家はわれわれの写した写真を見てこれにはせだと言つた。この先生は非常に記憶がよく、人を通じてこれは某々人の偽造にかかり、どのようにして甘肅まで売られたかかれはよく知っているとわれわれに教えてくれ、一九八四年に北京で私に會つてまたそのことを語つた。敦煌研究院の購入にたずさわつた人はこの話を聞くと、それは絶対不可能と言つた。なぜなら売り手はちよつとした金持の家で、解放以後原収蔵者が亡くなり、息子はそれらは父親が曾つて千仏洞で入手し愛蔵したものとして手放さず、但だ子孫たちはそれに興味が無く麻袋に入れて梁上になおせておいた。年月がたつにつれそれがしけて痛んでもかれらは

一向にかまわなかつた。わが院のスタツフが購入に出向いた時は、ひとやまの乱巻の中からこの紙質がよく筆蹟も極めてすぐれた六朝の遺物を選び出したのであつた。後におれわれは考証の結果、上に述べたように本件は未刻本と文字が異なる点を確かめた。にせもの作りは文章を修改することはできず、すなわちこの写本の内容は偽造者のこしらへ得ぬものに相違ない。

わが院の所蔵する土地廟出土の写経は藏経洞出土か否かについて異なる見方があり得ようが、しかしそれらは断じて贋品ではない。出土以後常書鴻氏はそれらを珍宝としてずっと研究所に保存してきたのである。

しかし確かに偽物も存在し、天津の陳という姓の男がにせの写経をこしらへ、李盛鐸の親戚も良心に缺けにせものを作って売つた。もと傳增湘氏収蔵の《鶻冠子》残巻については、陳某が敦煌写経の空白原紙を利用して唐代写経生の筆迹に做つて偽造したものと伝えられる。これは全卷二六紙、毎紙二八行で計七二八行、末題に「貞觀三年五月敦煌教授令狐衰伝写」とある(散〇七〇四)⁽⁴⁷⁾。私はもしそれが贋品なら長巻の用紙もにせに違ひないと考へる。なぜなら古代において紙はずつと貴重で手に入れるのが困難であり、敦煌遺書の少なからぬ卷子は表裏両面に書写されており、これは廃紙を書写に利用したからである。藏経洞出土

物中に字の書いてない未使用紙の存在した可能性はなからう。第一に敦煌藏経洞の状況を眞先に記載したスタインの《西域考古記》とペリオの《敦煌石室訪書記》は藏経洞の当時の現状を叙述する際、誰も「空白紙」があつたとは言つていない。第二に写経の末尾は一般に多くの余白を残していない。そして第三に一首の「打油詩」(ざれうた)がよくその間の事情を物語つてゐる。

書後に残紙 不可列(裂)將帰

雖然無手筆 且作五言詩

これはペリオ敦煌本に書かれた一首であるが、今その巻の番号は記憶していない。詩は巻尾に記入され、ほんの僅かな余白が残るだけである。第四に、たとへ余白があつても二八行の全一紙が何枚もといふことはあり得ない。第五に未使用の紙葉が藏経洞中に放置されるはずはなく、たとへ現在藏経洞の封閉理由はなお不明でも、いずれにせよ使つてない完全な新紙を入蔵する必要はあり得なかつた。

敦煌研究院所蔵写経にも贋品の含まれている可能性がある。0323は蕭齊建武四年の《金剛般若波羅蜜經》⁽⁴⁸⁾で、経文は鳩摩羅什訳本と一致し不分巻であるのに、首尾にはいづれも「金剛般若波羅蜜卷一百三十六」と書かれている。本件の紙は非常に薄く、解放前の毛辺紙のようで、現在は已に多数の紙片に碎けてしまつており(中に巻かれている部分

は状態がややましだが、三十年來編目と撮影の時唯二回開いて見ただけである。藏経洞出土遺書には陳朝のものがあり、その書写年代はちよう隋が陳を滅ぼす何年か前に当っており、隋の滅陳時に運んでこられたものと思われるが、蕭齊のものは未だ見たことがない。われわれはそれが偽造ではないかと疑っているので、何の宣伝もせず紹介や研究の対象としていない。〇〇九五《蒙求注》は目録を發表した時、私は附録した所の《敦煌遺書目録》に関する説明の中で、それについて少し解説を加えた。本件は冊頁装で紙は厚く、両面に書写され兩句ごとに注が附されその注文は小字で双行に書かれ、前に李良の《荐蒙求表》があり、正文は標題無く、但だ本文の前一行の下部に「安平李翰撰并注」と記されている。《蒙求》は中国の有名な童蒙の読物であり、古代には誰でも知っていた。ところがこの写本には表紙に二行のひどくぞんざいな字で、一行は「先天二年」、もう一行は「民国某年」（何年かは忘れたが）とあり、この兩行の字は同一人の筆になるとみられ、かかる情況を総合しわれわれはそれが偽物ではないかと疑い、従ってそれについても立入った研究は何もしていない。

要するに真偽の判別は、頗るむづかしい課題である。日本の学者はすでに少なからぬ作業をこれについてなされておられ、新しい発見もあつて、現在もこの方面の研究を進め

ている。われわれの敦煌研究院遺書研究所は、目下の所まだこの分野の作業に取組むに至らず、また先進技術による検測手段にも乏しい。以前われわれは潘吉星氏に古紙の標本を提供したが、しかし紙も千差万別なのでそれら限られた標本で鑑定するのは不可能である。

私は今度日本に参り、主として日本の公私収蔵敦煌遺書を考察し、かねて《敦煌遺書總目索引》一書の校勘も行い、台湾の黄永武氏編《敦煌遺書最新目録》より一層完備した目録を作ろうと計画している。王重民氏は中国民間に埋没しているものは五〇〇巻とみつもった。当時われわれはソ連に敦煌遺書の収蔵があることを知らなかつた。一昨年中華書局《文史知識》編輯部が編集した敦煌專号に、編者たちは私に「敦煌遺書は何冊ありや」という題目を与えたが、私は引受けず、こう答えた。「私は敦煌遺書研究所の所長だが、しかし現在までの所、私は確かな数字を知らず、まさに鋭意調査中である。」と。

敦煌研究院に敦煌遺書研究所ができて以来、私はこうした敦煌遺書の全貌をつかもうとする最も基礎的な仕事に打込んできたので、特別な研究はしておらず、ある人は私の為にそれを残念がつてくれる。けれども人には各々志があり、私はもし自らの手で中国の内外に散在する敦煌遺書の総目録を編成して公表できたら、私の心願は果され、研究

所の為にしっかりした基礎がきづけよう。

私が日本に参つてから東洋文庫の多数の先生方の支持を得ることができ、又東京大学東洋文化研究所の池田温氏の支持を得たことに、ここで感謝の意を表します。同時に皆様方が機会があれば敦煌においてになることを歓迎いたします。東洋文庫の敦煌文献研究委員会は大量の仕事をさし、研究成果は累々としています。現在の内陸アジア出土古文献研究は範囲が更に拡大し、研究も深まっております、私は皆様から学ぶ機会を得たことを光榮に存じます。有難うございました。

(一九九〇年二月於東京)

訳者附記

本稿は中国の敦煌研究院遺書研究所長施萍亭(娉婷)先生が、一九九〇年二月十七日東京の東洋文庫で内陸アジア出土古文献研究会において講演された内容を、当日聴講した池田温が施先生の講演原稿から日訳したものである。当日は敦煌研究院の劉永増氏が通訳に当られたが、時間の関係もあり細部を略された点が相当あった。本稿は全文を訳し、なお以下に若干の注記を附し読者の参考に供する。

註

- (1) 左景權「敦煌文書学(漢文篇)発凡」『敦煌吐魯番文献研究論集』北京大学中国中古史研究中心編、中華書局、一九八二、六一一頁、特に七頁。
- (2) 北京大学中国中古史研究中心編、第二輯以降は北京大学出版社刊、二輯(一九八三)、三輯(一九八六)、四輯(一九八七)、五輯(近刊)。
- (3) 敦煌文物研究所は一九八四年二月、中共甘肅省委の決定により敦煌研究院に昇格し、管下に遺書研究所等が設けられた。敦煌研究第二期、一九八五、七頁参照。
- (4) 商務印書館編「敦煌遺書總目索引」一九六二。重印本、中華書局、一九八三。王重民氏が中心となり、《斯坦因劫經錄》(劉銘恕編)と《伯希和劫經錄》(王重民編)を主体に、《北京圖書館藏敦煌遺書簡目》《敦煌遺書散錄》を加え、索引と附録を附す。全五五二頁。
- (5) 重印本巻頭の説明に「敦煌遺書總目索引……二十年來、由於它具有較高的學術水平與使用價值、對敦煌學的研究起了一定的促進作用、為中外學者所稱道。」という。
- (6) 敦煌文物研究所資料室編「敦煌文物研究所藏敦煌遺書目錄」文物出版社刊、五四一六七頁、圖版捌一玖。
- (7) 黃文煥「河西吐蕃經卷目錄跋」世界宗教研究二、一

- 九八〇、五六一六二頁。同「河西吐蕃卷式写經目錄并後記」世界宗教研究一九八二、一。
- (8) 閻文儒「莫高窟与敦煌」向達等著「敦煌」學習書店、一九五一。『這像是王道士所造的、在塑像時、爲修功德、他特將許多石室中的卷子、纏在像的中心柱內。』
- (9) 施萍亭「中國敦煌展一九八五—八六」目錄解說「九六妙法蓮華經序品第一・方便品第二」に、「敦〇一一一」号が北京において購入され、それが李盛鐸（木齋）旧藏と伝えられることで、当地土地廟出土物と敦煌民間収藏品、李木齋收藏品の三者が綴り合わされている」とのべらる。
- (10) 延祐三年奴婢賣買紅契については、施萍亭「延祐三年奴婢賣買文書跋」敦煌研究一九八九—二、六一—六四頁参照。
- (11) 大庭脩「唐代告身の古文書学的研究」『西域文化研究第三』法藏館、一九六〇。同「敦煌発見の張君義文書について」ヒブリア二〇、一九六一。
- (12) 吳志歩「殘卷傳殘卷については、劉忠貴「敦煌写本」三國志、步鷲傳」殘卷考略」敦煌學輯刊五、一九八四。
- (13) 大慈如來告疏の図版は、文物資料叢刊一、圖版捌二（縮小）及び「敦煌遺書書法選」（甘肅省博物館、一九八五）二六一—二七頁（稍拡大）。
- (14) 吳織、胡群耘「上海圖書館藏敦煌遺書目錄」敦煌研究一九八六一—二（總七）九八頁に〇五一、北涼義和写本として著録。但だ訳者の見る所では本跋の義和五年戊寅歳は、北涼ではなく魏氏高昌の年号（六一八年）に比定されるべきである。
- (15) 樊錦詩、馬世長執筆「莫高窟發現的唐代絲織物及其他」文物一九七二—二、五五頁、裏表紙図版五参照。第一三〇窟一九六五年発見。開元十三年の紀年をもつ。
- (16) 李永寧「本所藏へ文選、運命論」殘卷介紹」敦煌研究三、一九八三。
- (17) 王利器「敦煌旧抄卷子本說苑」反質篇」殘卷校記識語」龍門雜誌一—五、一九四七。同「敦煌本」說苑」跋」圖書季刊新九—三・四、一九四八。斐雲（趙萬里）「敦煌本說苑反質篇讀後記」文物一九六一—三、一八頁。
- 李永寧「敦煌文物研究所藏」說苑反質篇」殘卷校勘」一九八三年全國敦煌學術討論會文集 文史・遺書編（下）（甘肅人民出版社）一九八七、一九一五七頁、圖版一—一八。
- (18) 朱雷「跋敦煌所出」唐景雲二年張君義勳告」——兼論勳告制度淵源」『中國古代史論叢』（福建人民出版社）一九八二—三、三三三—三三九頁。
- (19) 施萍亭執筆「從一件奴婢賣買文書看唐代的階級壓

追」文物一九七二・二二、六八七・七一頁参照。

(20) 小田義久「敦煌三界寺の『見一切入藏経目錄』について」龍谷大学論集四三・四・四三五合併号、一九八九年一月、五五五・五七六頁参照。

(21) 吳曼公「敦煌石窟臘八燃燈分配窟龕名數」文物一九五九・五、四九頁。

金維諾「敦煌窟龕名數考」文物一九五九・五、五〇頁。

(22) 施萍亭「本所藏『酒帳』研究」敦煌研究創刊号、一九八三、一四二・一五五頁。卷頭圖版二十。

(23) 敦煌研究院〇三四〇、目錄に「全卷、此卷有武周新字、民字因避諱而作尸。」とある。(曇無蘭訳)大正藏經第一四卷經集部No. 五一〇。

(24) 蘇晋仁「敦煌逸經『祝毒經』考」中国史研究一九八六・一、六九七・七二頁。東晋帛尸梨蜜多羅訳〈灌頂七万二千神王護比丘經〉(大正藏一三三三・一)の異訳。敦煌研究院〇一〇(土)。

(25) 敦煌研究院〇一八(土)有頭無尾。この名の經は現行藏經に見当らない。或いは阿那律八念經(阿含部No. 四六)の類か。

(26) 敦煌研究院〇〇三七(土)有頭無尾。現行本は佛說舍利弗悔過經(安世高訳)。大正藏經第二四卷律部取No. 一四九二。

(27) 敦煌研究院〇〇四四(土)首尾欠。大正藏經第一八卷毘曇部No. 一五四七。

(28) 敦煌研究院〇〇四五(土)首尾欠。(康僧會訳)。大正藏經第四卷本緣部取No. 二〇六。

(29) 敦煌研究院〇一七三、首尾欠。(曇無蘭訳)。大正藏經第一卷寶積部取No. 三二一。大寶積經(1)三律儀會一三参照。

(30) 敦煌研究院〇一七八(木)首尾欠。(竺法護訳)。大正藏經第一二卷寶積部取No. 三二四。大寶積經(21)授幻師跋陀羅記會八五参照。

(31) 敦煌研究院〇一七八(1)、佛說幻土仁賢經断卷の紙背にあり、首尾欠。(支謙訳)。

大正藏經第一四卷經集部取No. 五八一。

(32) 敦煌研究院〇三三六号、楊森「敦煌遺書(佛說大藥善巧方便經卷上)札記」敦煌研究一九八九・四。一〇八・一一一頁、卷末圖版二十。

(33) 上海博物館、香港中文大学文物館合辦出版、一九八七年六月、二一×二八糎、八七頁。展品圖版五九頁、謝稚柳「敦煌莫高窟藏經洞、饒宗頤〈写經別録〉を冠し、上海博藏品三〇点については、鍾銀蘭女士執筆の解説を附す。吐魯番出土品は開元十六年西州請紙牒案卷だけで、他は殆ど敦煌写経、一部敦煌所出の小画像や版画を

含む。なお香港の公私所蔵七点も併陳され、本書に収められている。

- (34) 吳織、胡群耘「上海圖書館藏敦煌遺書目錄——附傳世本寫經及日本古寫本」敦煌研究一九八六年第二、九三—一〇七頁、第三期、八九—一〇一頁。
- (35) 北京圖書館善本組編、一九八一年七月序、綫裝一四七葉、油印。一〇六五件所収。經名の画順排列。
- (36) 〈寶行王正論〉〇七七二と〈四分律藏卷十四〉〇七〇五の二卷（共に日本の天平十二年五月一日題記）を北朝寫本と誤認著録した。
- (37) 一四七〈曇鸞祖師寫經〉北魏寫本。題箋に上記標題が附され「恭綽敬造」とある。大般涅槃經の嬰兒行、十功德兩品の釋を内容とし、卷中に「比丘惠翫元所供養、曇鸞寫」の題記あり。
- (38) 一六九〈有相夫人昇天變文〉五代寫本。六紙一五九行と一七〇〈同上〉五代寫本、三紙八六行の兩種あり。共に擬題。
- (39) 一七四〈敦煌石室擔供七種〉五代及宋寫本。唐人民間文書集冊、(一)家書一紙、(二)葬經二紙、(3)僧正致行者仗拙都督牒狀一紙、(4)卜筮法二紙、(5)分家據一張、(6)雇驢契一紙、(7)開蒙要訓一紙。
- (40) 二〇六〈行儀〉日本古寫本。首題、行儀。尾題、保安四年(一一二三)、嘉業(祿)三年と原目にあるが、業は承の異体とみられ一〇八年に相当する。祿を業と書く例はない。
- (41) 一九六〈文殊師利問菩提經〉日本天平十二年(七四〇)寫本。藤原皇后光明子の題記を附す、五月一日經の一。卷尾に光緒十七年(一八九一)正月廿二日武進費念慈の跋及び同年夏日の遼義黎庶昌の跋を附す。
- (42) 周叔弼氏は本名暹、周馥の孫、周学海の子に當り、一八九〇年生、実業家として活躍、新中国では天津副市长に多年任じ一九八四年逝去、歴史家周一良教授はその息。還曆を記念して「周叔弼先生六十生日記念論文集」(一九五一、周孫二家合刊。四二二頁。一九六七、香港龍門書店影印)が編刊されており、その善本・文物蒐蔵については、周珏良「两份遺囑一片心——爲紀念我的父親周叔弼而作」(文物天地一九八四年三期、一〇一—一頁)及び冀叔英「深切悼念周叔弼先生」(文獻二一輯、一九八五、一八四—一九〇頁)参照。
- (43) P二〇五五は〈佛說孟蘭盆經〉〈大般涅槃摩耶夫人品經〉〈佛說善惡因果經〉を連写した七m余の長卷で、夫々亡妻馬氏の百日齋、一年齋、三年齋追福の爲の供養題記を附す。最後の三年齋題記には、ご丁寧にも一七齋より三年齋に至る十回の齋に供養鈔写した經名が列挙さ

れるので、天津、北京、パリ三写本が一聯のもの知られる。J. Garnet, 吳其昱共編; Catalogue des Manuscrits Chinois de Touen-houang, Vol. I, 1970, 三九一—四〇頁参照。

(44) 吉川小一郎〈支那紀行〉卷一(「新西域記」下巻収)明治四五年二月三日條「道士は經卷二百本を携へ来る。故意に贖物を挿入せる如きを以て、夜半までに上中下の三種に分類す。寓主狡黠、一本の唐經を出し、値一百五十兩と称す。余は三兩と附せしも携へ帰り、更に古物商より漁り来りしか、反故一籠を示す。余は値十錢と称せしに、憤りて去る。」五九七頁。

(45) 「西域文化研究第三敦煌吐魯番社会經濟資料下」法藏館、一九六〇、圖版第三七。大庭脩氏解説は三五三—三五七頁。

(46) 李正宇「土地廟遺書の發現、特点和入藏年代」敦煌研究三期、一九八五、九二—九七頁は、土地廟遺書と藏經洞遺書は性格が根本的に異なると認め、土地廟遺書は明清時代の出土文献を和尚ラマが塑像中に納入したもので、王道士とは無関係と論ずる。訳者も一九八七年香港開催の敦煌吐魯番学会の報告で、土地廟遺書は藏經洞遺書と来源を異にし、王道士が塑像に入れたものではないと認めた。

(47) 王重民編「敦煌遺書總目索引」九、傅增湘藏敦煌卷子目錄、三二八頁。「鷓冠子(存卷上)(傅沅叔校過、有跋、載入藏園群書題記續集第二卷中)。」同著「敦煌古籍叙録」卷三子部上一八〇—一八一頁所収。

(48) 某佛典釋卷末題記、P二九四七。甲寅年「八三四月十八日書記」とある後に本詩が記されている。
(49) 目錄によると本卷題記は「建武四年歲在丁丑九月朔日、吳郡太守張環敬造。」とあり、四九七年に比定される。

(50) 摩訶摩耶經卷上(P二二六〇)末に「陳至德四年十二月十五日、菩薩戒弟子彭普信、敬造摩訶摩耶經兩卷。云々」の題記を附す。

(51) 文物資料叢刊一、六七頁六。「蒙求注」、国内只此一件、且爲折葉裝、原本應爲八葉(第一葉爲封面、第二葉被撕毀、痕迹尚存、第八葉只写了幾行、未完而擱筆)、現存七葉。全文共七十三行、前爲李良《荐蒙求表》の後半段、共二十二行、接着是《蒙求注》自「王戎簡要、裴楷清通」始、以「鳴鶴日下、土龍雲間」終、共五十句。其注釈、每兩句一注、注文小字双行、書于正文之下。正文無題、只在正文前一行的下角写「安平李翰撰并注」。捉《敦煌古籍叙録》介紹、巴黎藏《李翰蒙求》二卷、但所保存的内容都不及這一卷多。

(52) 敦煌写本の眞偽問題について、積極的に取組み発言している代表的学者は藤枝晃(京都大学名誉教授)である。氏は曾て実見された国内の十二蒐集(大谷大、龍谷大、京都国立博、天理圖書館、藤井有鄰館等を含む)及び写真で検した四蒐集について、その九〇%以上は偽物と明言された(Zinbun 九、一九六六、一四一―一五頁)。それを裏付ける詳論は未発表であるが、李盛鐸藏印の偽物の存在について「徳化李氏凡將閣珍藏」印について(京都国立博物館学叢七、(一九八六年一月)に細説されている。

(53) 潘吉星『中国造纸技術史稿』(北京、文物出版社、一九七九)第十章敦煌石室写経紙研究、一七一―一八頁。〈敦煌石室写経紙検査結果一覽表〉には廿三件のデータを挙げる。但だ佛説无量寿経を五代とするのは疑問で九世紀前半か。

(54) 黄永武編『敦煌寶藏』全二四〇卷(臺北、新文豐出版社、一九八一―一九八六)の附録として編纂され全九三七頁、一九八六年九月、臺北刊。ロンドン七五九九件、碎片一九七件、木刻一九件、北平八七三八件、パリ六〇三八(一―二〇〇〇、四一〇〇―四四九九、五〇四四―五五二一、五五九九―六〇〇〇欠)件、レニングラード二九五四件、その他散録、欣賞篇等を含む。

(55) 文史知識一九八八年八号(總第八六期)敦煌学專号、中華書局、全二一九頁。一〇頁に盧秀文「敦煌遺書知多少」の短文が載り、北京図書館一〇〇〇〇余、大英図書館一二九七、パリ国立図書館六〇〇〇余、レニングラードアジア諸民族研究所一〇五〇、橘瑞超四二九、旅順博物館一八九、甘肅省図書館一〇〇余、甘肅省博物館一三七、敦煌研究院三六七、敦煌県博物館漢文七八、藏文二二六、西北師範学院二二、上海博物館一八二、天津芸術博物館三〇〇余、台湾中央図書館一五三、台湾歴史博物館二〇余、英国インド事務部図書館藏文七六五、大谷大学三八、龍谷大学七、中村不折一六三、其他日本人計二〇八、デンマーク王家図書館一四、等を算えている。